

こども まんなか アクション

— ファクトブック —

2026年第4版
令和8（2026）年2月

こどもまんなか
こども家庭庁

CONTENTS

第1章	こども・子育てにやさしい社会づくりの現状	2
	出産や子育てにやさしい社会（「令和2年度少子化社会に関する国際意識調査報告書」より）	
	こども連れで不便、理解や配慮が欲しいと感じる場面	
	（「こども・子育てにやさしい社会づくりのためのニーズ調査2023」より）	
	こども未来戦略 [令和5（2023）年12月22日閣議決定]	
	こども大綱 [令和5（2023）年12月22日閣議決定]	
第2章	こども家庭庁が取り組む「こどもまんなかアクション」	6
	こどもまんなかアクション	
	こどもまんなか応援サポーター	
	こどもまんなかアクションの様々な取組	
第3章	こどもまんなかアクションの事例	10
	居場所づくり・こども食堂	
	インクルーシブ社会	
	こども・子育て応援	
	こども・若者主体のアクション	
	体験型等こどもの育ち応援	
	共働き・共育て	
	こどもまんなか応援サポーターとの連携	

本資料に関する問い合わせ先

こども家庭庁こどもまんなかアクション推進室
e-mail : kodomokatei-action@cfa.go.jp

第1章

こども・子育てに やさしい社会づくりの 現状

Contents

出産や子育てにやさしい社会 （「令和2年度少子化社会に関する国際意識調査報告書」より）	3
こども連れで不便、理解や配慮が欲しいと感じる場面 （「こども・子育てにやさしい社会づくりのためのニーズ調査2023」より）	4
こども未来戦略 [令和5（2023）年12月22日閣議決定]	5
こども大綱 [令和5（2023）年12月22日閣議決定]	5

こども
まんなか

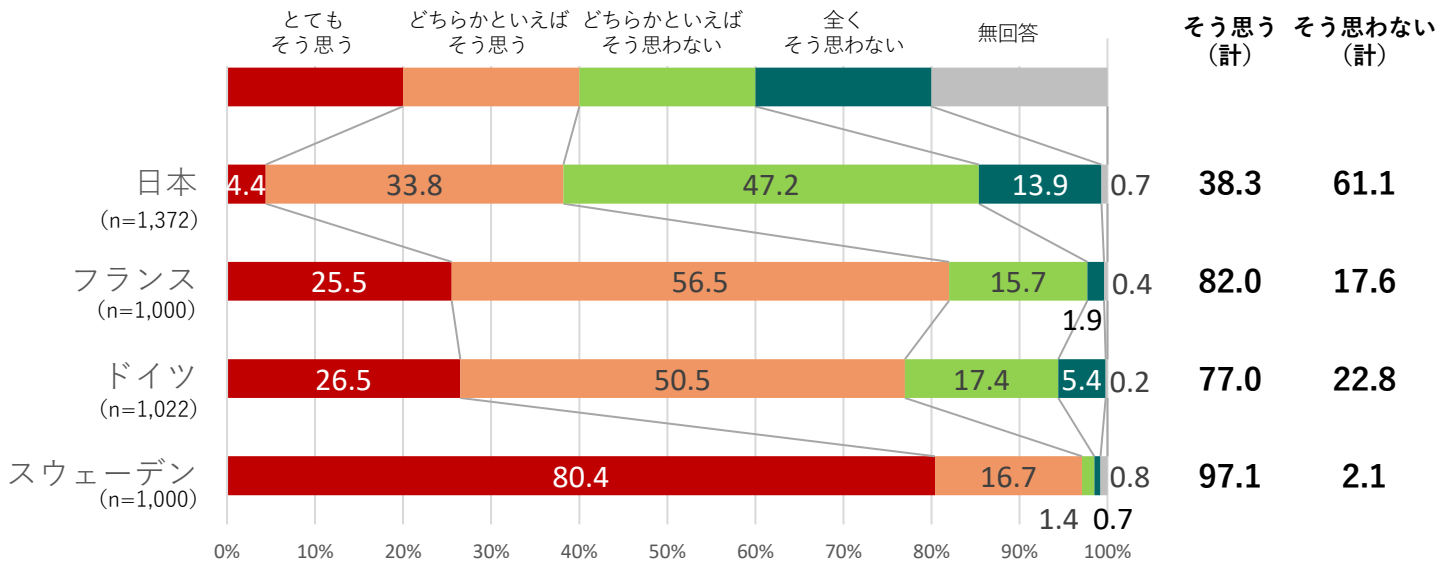
出産や子育てにやさしい社会

日本が出産や子育てにやさしい国と感じている人は少数派

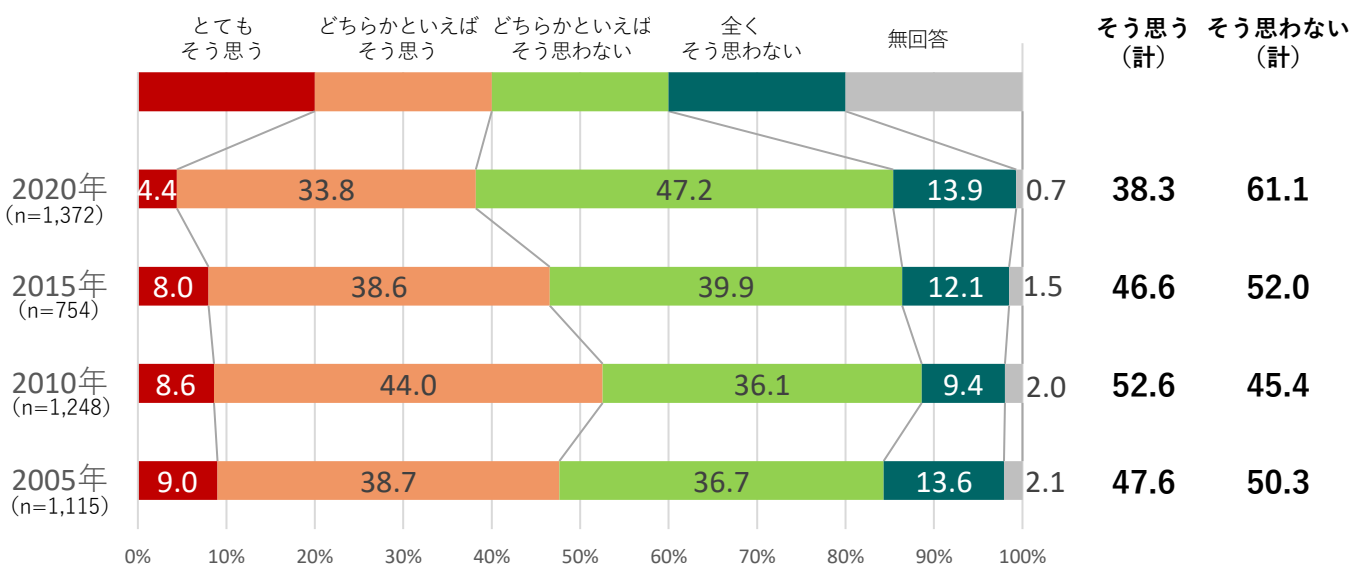
自国が子どもを生き育てやすい国か？——内閣府の「令和2年度少子化社会に関する国際意識調査報告書」によると、日本、フランス、ドイツ、スウェーデンの4カ国の20～49歳の男女に質問した結果、日本では「とてもそう思う（4.4%）」と「どちらかといえばそう思う（33.8%）」を合計した「そう思う（計）」は38.3%で少数派であることがわかりました。これに対して、フランス、ドイツ、スウェーデンでは「そう思う（計）」は75%以上で、4人に3人以上を占める多数派であることがわかりました。また「とてもそう思う」と答えた人はフランス、ドイツで25%以上、スウェーデンでは80%以上に上りました。

また、日本について過去の調査結果を見ると、2010年に「そう思う（計）」と答えた人は52.6%で過半数を占めていました。しかしその後の10年間で大きく減少した一方、「そう思わない（計）」と答えた人が15ポイント以上も増加し、日本が子どもを生き育てやすい国ではないと思う人が増えていることがうかがえます。

子どもを生き育てやすい国だと思うか（4カ国比較、2020年）



子どもを生き育てやすい国だと思うか（日本）



* 出典 内閣府 子ども・子育て本部：令和2年度「少子化社会に関する国際意識調査」報告書（概要版）

https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13024511/www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/r02/kokusai/pdf_g-index.html

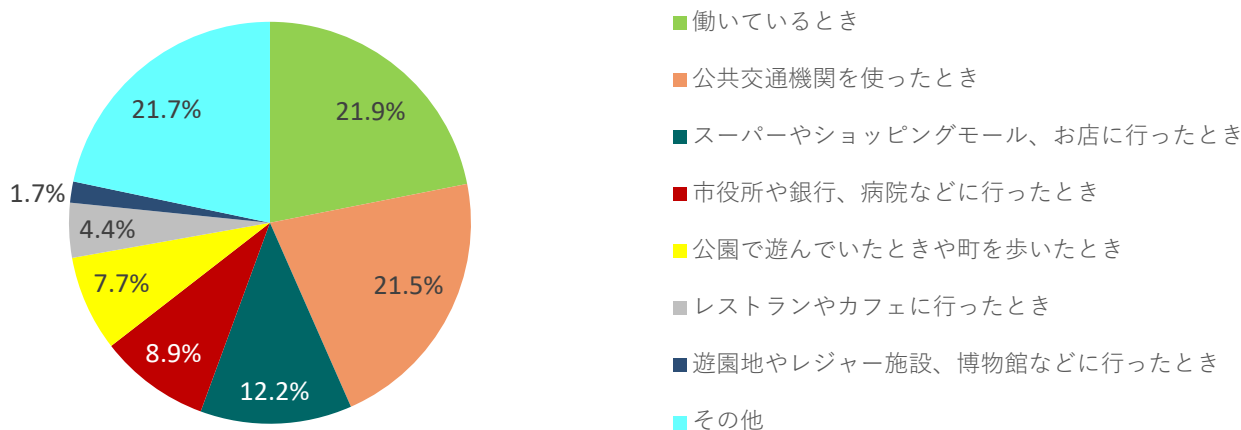
こども連れで不便、理解や配慮が欲しいと感じる場面

「働いているとき」や「公共交通の利用時」など様々な場面で感じている

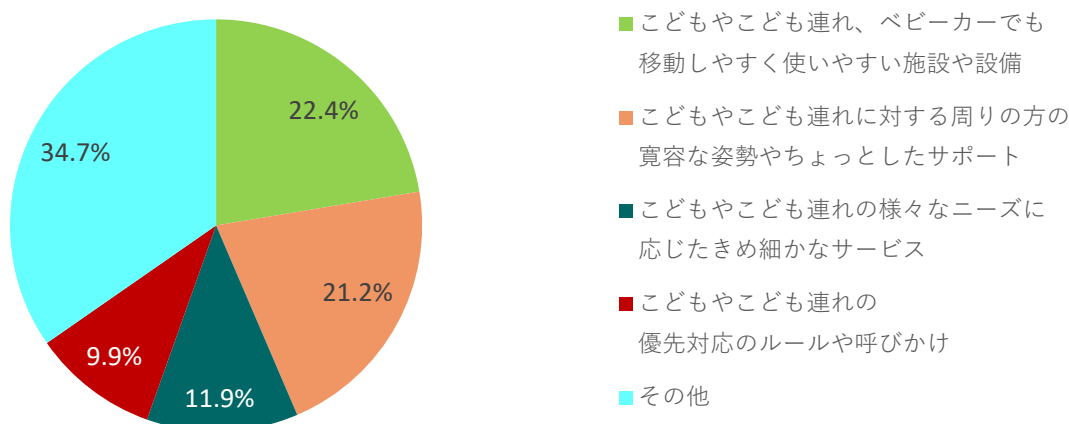
こどもと一緒にいるときに不便を感じたり、理解や配慮が欲しかった場面は？——こども家庭庁が令和5年に実施した「こども・子育てにやさしい社会づくりのためのニーズ調査」には、4,000以上の回答が寄せられました。その結果、「働いているとき（21.9%）」、「公共交通機関を使ったとき（21.5%）」がともに20%を超え、「スーパーやショッピングモール、お店に行ったとき（12.2%）」、「市役所や銀行、病院などに行ったとき（8.9%）」が続きました。

また、「周りから欲しかった理解や配慮の内容」を見ると、「こどもやこども連れ、ベビーカーでも移動しやすく使いやすい施設や設備（22.4%）」と「こどもやこども連れに対する周りの方の寛容な姿勢やちょっとしたサポート（21.2%）」がそれぞれ20%を超える結果となりました。そして「その他」も30%以上に上り、周りから欲しい理解や配慮の内容が多様であることがわかります。

こどもと一緒にいるときに不便を感じたり、理解や配慮が欲しかった場面（全4,455件）



周りから欲しかった理解や配慮の内容（全4,215件）



* 出典 こども家庭庁：こども・子育てにやさしい社会づくりのためのニーズ調査2023
<https://www.cfa.go.jp/policies/kodomo-mannaka>

次頁以降では、現在のこども・子育てにまつわる課題を解決するために、我が国が示した「こども未来戦略」と「こども大綱」についてご紹介します。

こども未来戦略 [令和5（2023）年12月22日閣議決定]

II. こども・子育て政策の強化：3つの基本理念

1. こども・子育て政策の課題
 - (1) 若い世代が結婚・子育ての将来願望を描けない
 - (2) 子育てしづらい社会環境や子育てと両立しにくい職場環境がある
 - (3) 子育ての経済的・精神的負担感や子育て世帯の不公平感が存在する
2. 3つの基本理念
 - (1) 若い世代の所得を増やす
 - (2) **社会全体の構造・意識を変える**
 - (3) 全てのこども・子育て世帯を切れ目なく支援する

III. 「加速化プラン」～今後3年間の集中的な取組～

1. 「加速化プラン」において実施する具体的な施策
 - (1) ライフステージを通じた子育てに係る経済的支援の強化や若い世代の所得向上に向けた取組
 - (2) 全てのこども・子育て世帯を対象とする支援の拡充
 - (3) 共働き・共育での推進
 - (4) **こども・子育てにやさしい社会づくりのための意識改革**
2. 「加速化プラン」を支える安定的な財源の確保
3. こども・子育て予算倍増に向けた大枠

加速化プランの取組の中で生まれた「こどもまんなかアクション」

加速化プランの4つ目の施策「こども・子育てにやさしい社会づくりのための意識改革」は、こども・子育て政策を実効あるものとするために、こどもや子育て中の方々が気兼ねなく様々な制度や支援メニューを利用できるよう、地域社会、企業など様々な場で、年齢、性別を問わず、全ての人がこどもや子育て中の方々に応援するといった社会全体の意識改革を進めることを目的としています。

そしてこの施策のひとつとして、令和5（2023）年5月に「こどもまんなかアクション」がスタートしました。こどもたちのために何がもっともよいことを常に考え、こどもたちが健やかで幸せに成長できる社会を実現するという「こどもまんなか」の趣旨に賛同する企業・個人・地方自治体などに「こどもまんなか応援サポーター」となってもらい、「今日からできること」を実践し、取組んだ内容を自らSNSなどで発信してもらっています。この「こどもまんなかアクション」の取組に加え、こども・子育てを応援する様々な取組事例の共有などにより、こども・子育てにやさしい社会づくりのための意識改革を目指していきます。

こども大綱 [令和5（2023）年12月22日閣議決定]

第4 こども施策を推進するために必要な事項

- 2 こども施策の共通の基盤となる取組
 - (5) **こども・若者、子育てにやさしい社会づくりのための意識改革**

「こども大綱（令和5年12月22日閣議決定）抜粋」

こどもや若者、子育て当事者が気兼ねなく様々な制度や支援メニューを利用できるよう、地域社会、企業など様々な場で、年齢、性別を問わず、全ての人がこどもや子育て中の方々に応援するといった社会全体の意識改革として「こどもまんなかアクション」を進めていきます。子育て当事者がこどもと一緒にいるときに感じた不便や周囲に求める理解や配慮に関する調査結果を踏まえ、国の施設や他の公共施設、民間施設におけるこどもや子育て家庭を優先して受け付ける取組やこども・子育てを応援する地域や企業の好事例の共有・横展開、公共交通機関等における妊産婦や乳幼児を連れた家庭に対する分かりやすい案内や妊産婦や乳幼児を連れた家庭への配慮に関する利用者の理解・協力の促進など、様々な取組を通じてこどもや子育て当事者を社会全体で支える気運を醸成していきます。

第 2 章

こども家庭庁が取り組む こどもまんなか アクション

Contents

こどもまんなかアクション	7
こどもまんなか応援サポーター	8
こどもまんなかアクションの様々な取組	9

※こどもまんなかアクションに関する
こども家庭庁ウェブサイトはこちら

こども
まんなか

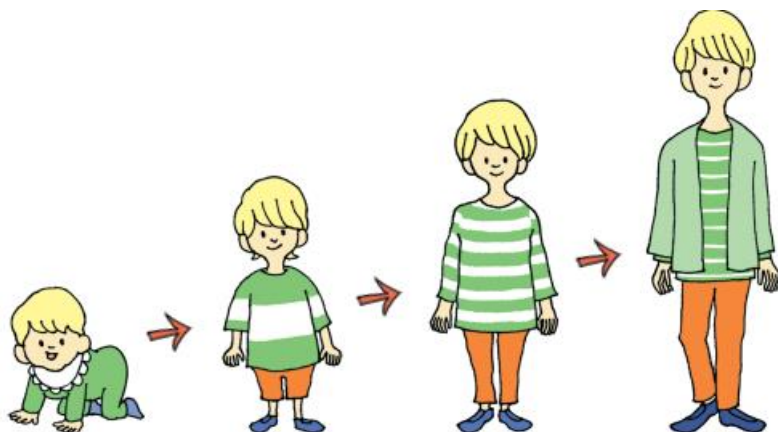


こどもまんなかアクション

こどもの定義

こども家庭庁の「こども」は年齢で区切っていません。

こども基本法では、18歳や20歳といった年齢で必要なサポートがとぎれないよう、心と身体の発達の過程にある人を「こども」としています。



こども・子育てにやさしい社会づくりのための「こどもまんなかアクション」

「こどもまんなかアクション」とはこども・子育てにやさしい社会づくりのための気運醸成の活動です。

「こどもまんなか」の趣旨（右図参照）に賛同する「こどもまんなか応援サポーター」自らがアクションに取り組み、その情報を発信いただくことに加えて、その内容をこども家庭庁としても庁のサイトやSNSなどを通じて発信します。そしてこの活動を柱に全国で自治体主催の「リレーシンポジウム」を開催するほか、応援サポーターとの活動連携や意見交換、春・秋のこどもまんなか月間や夏休みに行うイベントなどを通し、サポーターのみなさんの活動をつなげ、見える化し、社会の理解・共感をいただくことで気運の醸成をはかっています。

すべてのこどもや若者たちが
幸せに暮らせるように、
常にこどもや若者の今と
これからにとって
最もよいことは何かを考え、
社会全体で支えていくこと。



こどもまんなか応援サポーター

こどもまんなかアクションを広げる「こどもまんなか応援サポーター」

「こどもまんなか」の趣旨に賛同し、自身が考える「こどもまんなか」なアクションを自ら実行することと発信に取り組んでいただける個人、団体・企業、自治体等を、「こどもまんなか応援サポーター」と呼んでいます。

こどもまんなか応援サポーターに参加するために、申請や届出などの手続きは必要ありません。こどもまんなかの趣旨に賛同し、今日からできる身近な「こどもまんなか」なアクションを実行し、SNSで「#こどもまんなかやってみた」を付けて発信いただくだけで、こどもまんなか応援サポーターとなります。



「こどもまんなか応援サポーター」参加の流れ

- ①「こどもまんなか」の趣旨に賛同する
- ②サポーター自身が考える「こどもまんなか」なアクションを実行する
- ③ご自身・団体のアクションを「#こどもまんなかやってみた」をつけてSNS等で発信する。

こどもまんなかマーク

こどもまんなかマークは、応援サポーターのみなさんがこどもまんなかアクションの趣旨への賛同の意思を表明するためのものです。令和5（2023）年6月に実施した国民の皆様からの一般投票により決定しました。

こども
まんなか

※こどもまんなかマークに関する
こども家庭庁ウェブサイトはこちら



こどもまんなかマークは、文字に様々な色を使うことで、こどもの多様性や個性を表し、多くの人の思いやアクションがあることを表現しています。

41道府県、368市区町村、3,754の団体・企業・個人が
こどもまんなか応援サポーター参加 ※令和8年1月26日現在

こどもまんなかアクションの様々な取組

「こどもまんなかアクション」リレーシンポジウム

こどもや子育て世代にやさしい社会づくりを推進する取組が全国に広がるよう、自治体が主体となり、「こどもまんなかアクション」リレーシンポジウムを開催します。

令和5（2023）年10月30日に和歌山県で行ったシンポジウムを皮切りに、令和5年度は11か所、令和6年度は18か所で開催。シンポジウムではこども家庭庁や有識者による基調講演や、地域での活動事例の発表、テーマによってはこども・若者も登壇し、パネルディスカッションなどが行われています。令和7年度は、秋田県、八幡浜市、沖縄県など18か所程度で順次開催します。



地域の若者がスタッフとして参加
(佐倉市主催シンポジウムより)

過去開催地域

令和5年度	北海道、埼玉県、神奈川県、福井県、和歌山県、愛媛県、大分県、栃木市、奈義町、福山市、北九州市
令和6年度	青森県、山形県、新潟県、滋賀県、鳥取県、熊本県、仙台市、取手市、前橋市、佐倉市、大田区、羽咋市、浜松市、京都市、豊中市、呉市、北九州市、鹿児島市

こどもまんなかアクション公式LINE

こどもまんなかアクションの公式LINEアカウントでは、子育てを応援する様々な情報をご覧いただけます。公式LINEアカウントの友だち登録者数は現在、11万人を超えています。



こども家庭庁公式note こどもまんなかアクションマガジン

note

こども家庭庁公式noteの中の、こどもまんなかアクションマガジンでは、こどもまんなかアクションの取組や、こどもまんなか応援サポーターと連携した取組事例などを紹介しています。



次章では、こどもまんなか応援サポーターが中心となって行われている「こどもまんなかアクション」の代表的な事例をご紹介します。

第 3 章

こどもまんなか アクション の事例

Contents

居場所づくり・こども食堂	11
インクルーシブ社会	13
こども・子育て応援	14
こども・若者主体のアクション	16
体験型等こどもの育ち応援	18
共働き・共育て	20
こどもまんなか応援サポーターとの連携	21

※こどもまんなかアクションに関する
こども家庭庁ウェブサイトはこちら

こども
まんなか



こどもまんなかアクションの事例①

居場所づくり・こども食堂(1)

おやこ食堂もぐもぐ・みんなの居場所 (NPO法人もぐらの冒険/千葉県市原市)

“脱・孤食”を目的に始めたおやこ食堂もぐもぐの活動は、当初、子連れで気ままに食事ができる場としてスタートしました。誰かに頼って子育てする場はまだまだ少ないと考え、もっと地域に開いていくために、定期的に子ども食堂を開催しています。そこでは団体の元々の取組である「あそび場」の要素が合わさっており、こどももおとなも、誰にとっても“居場所”であるような場づくりを目指しています。

私たちはこどもの権利と新たな価値の創造！これを出会ったみなさんと考え、一緒に取り組んでいくことが楽しみです！



こどもの居場所@飛騨高山 (NPO法人ねこのひげ/岐阜県高山市)

こどものありのままを全肯定するをモットーに開設するこどもの居場所です。全ての起点は、ひとりひとりの心(気持ち・主観)にあり、何をするか、しないか、どのように、どこまで・・・など、自分で決めて(時には相談したり話し合ったりして)過ごしています。

こどもを一人の主体として尊重し、寄り添い繋がり続ける事を大切に、関わる皆で変化しながら居場所づくりを続けています。利用条件(料金、年齢、障害など)をなるべく減らし誰でも来ることのできる場であると共に、多様な人が関わりあうことで、どんな状況のこどもも取り残さない地域へ近づきたいと願って活動しています。



こどもまんなかアクションの事例②

居場所づくり・こども食堂(2)

サイボウズの楽校（サイボウズ株式会社／東京都）

サイボウズの楽校は、「仲間と一緒にしあわせに生きる力」を育むフリースクールです。

こども一人ひとりの「自分らしさ」を大切にしながら、安心できる環境で多様な仲間と協力し合う力を育てます。

学習指導要領の良い部分を取り入れつつ、教科の枠を超えた学びや、こども自身の興味を活かした活動も充実。日々の様子はテキストや写真をオンライン（キントーン）上で丁寧に保護者へ共有し、学びの記録もいつでもご覧いただけます。「学校に行けない」ではなく、「ここでなら自分らしく学べる」と思える場所を目指しています。



じどうかん食堂（岩室地域児童館ボランティア運営協議会／新潟県新潟市）

常設のこどもの居場所である児童館という施設を利用して「こどもをまんなかに」地域とこどもがつながる機会を創出しています。

また、こども食堂の開催により、偏食や孤食など食を通じたこどもの課題発見、子育て家庭の保護者の不安にも寄り添える機会が増えています。

近隣の高校生も配膳ボランティアなどとして参加し、老若男女問わず活躍しており、あらゆる世代がこどもまんなかでつながっています。

この取組により、児童館機能の更なる波及と地域住民の参画を広げ、地域コミュニティの強化にも役立っていきたいと考えています。

点から線へ、そして面でつながることにより、「こどもまんなか」の実現を目指しています。



こどもまんなかアクションの事例③ インクルーシブ社会

バリアフルレストラン

(公益財団法人日本ケアフィット共育機構・川崎市・川崎市立川崎高等学校／神奈川県川崎市)

バリアフルレストランは、“障害の社会モデル”の考えをもとに、“社会が作り出す障害”を体感できる体験学習プログラムです。「かわさきパラムーブメント」の心のバリアフリーを推進する取り組みの一環として、川崎市立川崎高等学校の文化祭で開催しました。日本ケアフィット共育機構がサポートし、福祉科の生徒が3か月前からプログラム検討に関わり、当日の運営やプログラム説明もすべて生徒たちで担当しました。障害への理解や“気づかない当たり前”を見直すきっかけを、企画に参加した生徒だけでなく文化祭の来場者にも幅広く提供することができました。



クロスボーダー・プロジェクト (クロボ) (都留文科大学／山梨県都留市)

「クロスボーダー・プロジェクト (クロボ)」は、障がいの有無・軽重にかかわらず、地域のだれもが安心して楽しく参加できることを念頭においた、週末の居場所づくりの活動です。2014年11月に活動を開始しました。

学期中の5～7月と10～12月、月1回土曜日 (10:00～15:00) に、都留文科大学の施設を使って開催しています。多いときには100名にもおよぶ、学生・教員・市民・参加者 (幼児～成人) とで協働しながら、スポーツ、アート、音楽、そうごう学習、環境学習などの活動を開催しています。

クロボは、こども・大人の居場所づくりの実践とも、障がい児・者の生涯学習支援の実践とも言うことができ、その場にいる皆で、インクルーシブな空間を共につくっています。



こどもまんなかアクションの事例④ こども・子育て応援(1)

赤ちゃんを知る授業 (ピジョン株式会社/全国)

日本全国の中学生を対象とした「赤ちゃんを知る授業—赤ちゃんにやさしい未来のために—」は、赤ちゃんにやさしい未来を実現するために社会全体で育児を考え、赤ちゃんにやさしい行動につなげる取組です。日本では、核家族化や少子高齢化により、幼い頃から赤ちゃんを見たり触れたりする機会が減っていることが考えられます。本教育プログラムは、中学生に赤ちゃんへの興味・関心を持ってもらい、社会の一員として自らできることを考え、行動につなげる機会を提供しています。2021年9月から教材提供を開始し、2024年12月までに延べ約450校、約37,000名に受講いただきました。この取組を通じて、中学生による赤ちゃんへのやさしい行動を促すとともに、将来に自身や周囲が出産・育児をする際の意識や行動へとつなげることで、赤ちゃんにやさしい未来への道を拓いてまいります。




ここみパパ部 (一般社団法人ここみ/静岡県浜松市)

『ここみパパ部』はパパの子育てを応援するプロジェクトです。パパ部ではここみが運営する3か所の子育て支援ひろばで「隣の子育て聞いてみよう！パパのおしゃべり会」と「もうすぐパパになるあなたに！プレパパ教室」を開催しています。

「パパのおしゃべり会」は2016年から子育て中のパパが進行役を務める形でスタートしました。子育ての悩みや子育てのおすすめ情報を話しながらパパ同士の交流を行っています。

プレパパ教室はパパになるための知識とマインドを学ぶ「パパになるための準備教室」とだっこの仕方とだっこ紐の選び方を知る「プレパパのためのだっこ教室」の2回シリーズです。

今後もパパが主役のパパ講座をとおして子育てを楽しむパパが増えるよう取り組んでいきます。



**子育てを楽しむ父親になる
ここみパパ部！**

子育てはわからないことだらけ
パパだってもっと育児にかかわりたい！もっと仲良くなりたい！
家族は「ある」ものではなく「育む」もの
子育てを楽しめる家族であり続けるためのヒントがここに！



こどもまんなかアクションの事例⑤ こども・子育て応援(2)

働けるフリースクール (株式会社includia/千葉県市原市)

フリースクールオリコスでは、「働けるフリースクール」として、こどもを通わせる保護者がスクール内で仕事のスキルを学び、実際の業務に取り込むことで報酬を得られる仕組みを導入しています。当事業は、企業にとっては人材不足の対策としてメリットがあり、こどもにとっては、つながった企業の職場見学や体験学習として還元されるメリットがあります。今後さらに企業とのつながりを増やし、見学や体験を通じてこどもが就職するなど、最終的には不登校のこどもの将来の選択肢が増えるように取り組みたいと考えています。



トーキョーコーヒー (アトリエe.f.t./全国)

アトリエ e.f.t.では、「不登校はこどもの問題ではなく大人の課題」と考えています。トーキョーコーヒーは、教育システムを進化させていくムーブメントで、大人とこどもが安心して楽しめる居場所を全国に広げ、教育や本質的に豊かな生き方・社会について対話する拠点をつくっています。名前は「登校拒否」の文字を入れ替えたアナグラムで、「世界一たのしい教育革命」を掲げ、2022年8月8日に発足。お母さん・お父さん・大人たちが夢中で活動し楽しむ姿こそが、こどもに安心感を与え、自信や意欲を取り戻すきっかけになります。現在、全国約415拠点で、大人もこどもも自然体で過ごせる本質的な居場所づくりを進めています。



こどもまんなかアクションの事例⑥

こども・若者主体のアクション(1)

チーム“なないろ”による不登校支援プログラム（南九州大学／宮崎県都城市）

南九州大学都城キャンパス内に、都城市教育支援センター“青空ラボ”は設置されました。このラボに通う不登校の児童生徒に対して、子ども教育学科の学生で構成するチーム「なないろ」は、年間を通して不登校支援プログラムを行っています。

チーム「なないろ」の活動に賛同した大学生ボランティア50人と共に、こどもたちの「やりたい」を大切にしたい学びを支援します。ピアノ室や家庭科室、体育館や畑などの施設を使い、大学の教員や学生サークルの協力を得ながら、緩やかなフレームで多様な場・人と共に、教科学習や体験的な学習を積極的に取り入れて活動しています。

こどもたちが家庭から外に出て、大学生と活動し、同年齢のこどもたちとの関わりも生まれ、笑顔で過ごしています。このような生き生きと学び、過ごせる場を保障していきます。

チームなないろは、近隣市の小林市においても同様の不登校支援プログラムを展開していきます。



こどもたちへの本の贈り物プロジェクト

（岩手県立盛岡第一高等学校M探Bookmark／岩手県盛岡市）

岩手県立盛岡第一高等学校の総合的な探究の時間の活動として、こどもたちが本を身近に感じられることを目的に、ひとり親家庭の18歳以下のこども104人に本を贈る活動を行いました。はじめに、盛岡市内の書店員の皆様と私たち高校生で、18歳以下のこどもにおすすめしたい本のリストを作成して、対象家庭に配付し、こどもたちに欲しい本を選んでもらいました。そして、支援機関の協力のもと、各家庭に希望の本を届けました。本を届ける際には、こどもたちが継続的に本を読むきっかけとなるよう、学校や地域の図書館で借りられる本を紹介したリーフレットを同封しました。活動にあたっては、市内の企業や市民の皆様にご支援をいただきました。

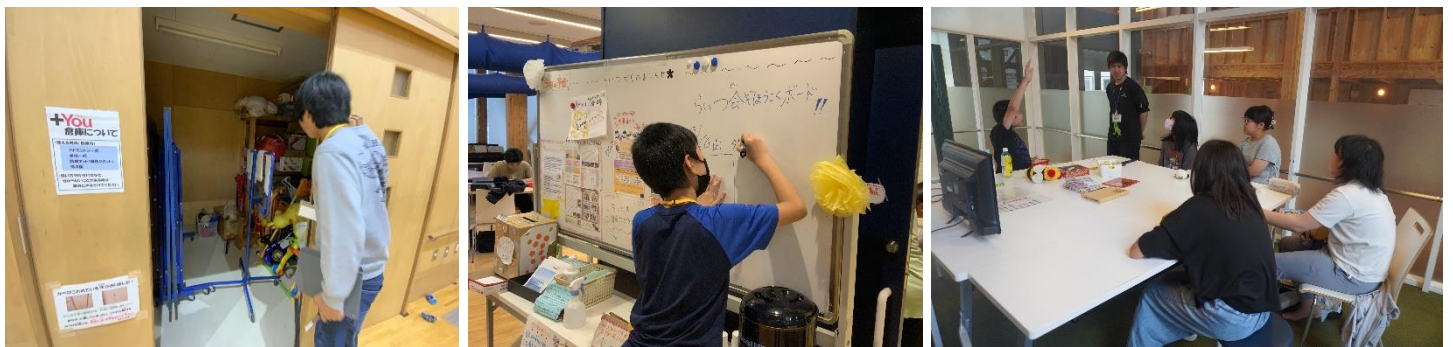


こどもまんなかアクションの事例⑦

こども・若者主体のアクション (2)

らいつ会議 (子ども会議) (石巻市子どもセンターらいつ/宮城県石巻市)

「らいつ」とは石巻市子どもセンター（児童館）の愛称です。この愛称は、中学生が考えたもので、全国から集まった愛称候補から選ばれました。らいつの由来は英語でrights(権利) lights(ひかり) の二つの意味を持ち、こどもの権利の拠点として、未来の希望の光としてセンターが存在するという願いが込められています。らいつ会議では、らいつの利用方法に子どもたちの声を反映するため、小学4年生から高校生までのメンバーが月に2回集まり、遊具やおもちゃ、ルールについて様々な意見を出し合っています。今年「らいつのみんながだれにでも声をかけられて、優しくできるらいつ」「暴言・悪口をなくして当事者が正面から話し合うらいつ」という目標を立てました。会議メンバー自らが会議の進行や書記等の役割を担い、必要であれば会議メンバーが利用者にインタビューなどをして、より広く利用者の声を聞けるように会議のやり方を考えました。また、自分たちの活動に活かすため、県内の他のこども参加で運営をしている児童館を見学に行き、良いところや自分たちでもできそうなことを取り入れ、イベントや運営に活かしています。



仏生山こどもらぼ (香川大学 佛生山らぼプロジェクト/香川県高松市)

仏生山こどもらぼの主な取組は、大学生と地域住民が協力して、子どもたちに多様な体験の機会を提供し、地域の世代間交流を図ることです。昨年度、実施した「体験してみたいこと」の聞き取りをもとに、実現可能な内容を計画に反映しています。地域のお祭りやイベントでの出店体験など、学校では得られないような体験を大学生のサポートのもとで実施し、子どもたちの成長につなげることを目的としています。また、主体性を育むため、活動内容について子どもたちの意見を積極的に取り入れ、計画の流れから大きく外れることなく反映できるよう工夫しています。今後も、子どもたちとともに学び合い、成長し合える活動を続けていきます。

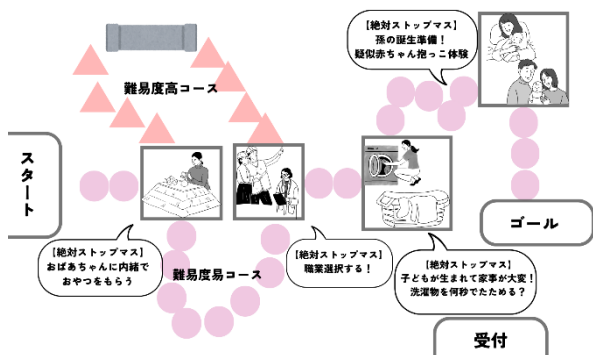


こどもまんなかアクションの事例⑧

体験型等こどもの育ち応援(1)

100年すごろく！（一般社団法人はぐネット／石川県野々市市）

「100年すごろく！」は、人生100年をテーマにしたオリジナルのすごろくゲームです。誕生から成長、大人になり、孫が生まれるまでを体験できる内容で、マスの一部に【絶対ストップマス】を作り、そこで世代間の交流を促進します。マスのミッションを達成するとウェルビーイングシールを獲得できます。ゲーム制作の過程では、多世代で「昔」「今」「これから」を語り合い、それぞれの視点を共有し、すごろくの内容を考えました。当日は、シニア世代2名、大学生8名、地域コーディネーターがスタッフとして、親子30組の参加者と交流しながら部屋全体をすごろくの盤としてゲームを進行しました。今後は、ゲームの汎用性を高め、さらに多世代が交流するきっかけをつくりたいです。



こどもてつがく（一般社団法人てつがく屋／公益財団法人丸亀市福祉事業団／香川県）

私たちは、こどもたちが自ら疑問を持ち、創造的に思考する力を育てたいと願い、令和4年度より小学生を対象に月1回の哲学対話に取り組んでいます。この活動では、正解のない問いについて、こどもたちが自由に意見や疑問を交わしながら考えを深め、安心して探究できる場を一人ひとりが担う意識も育みます。

こどもたちは、回を重ねるごとに、根拠を示して自分の考えを説明したり、他のこどもに問いかけたりできるようになりました。こうした成長をより多くの大人に知っていただきたいと考え「公開こどもてつがく」を開催しました。登壇したこどもたちは、来場者を前に、堂々と議論を交わし、大人からは「子どもの発想から考えさせられた。」「自分も混じりたい。」との声が寄せられました。登壇したこどもたちの方は、大人の真剣な傾聴に驚いた様子でした。



こどもまんなかアクションの事例⑨

体験型等こどもの育ち応援(2)

子育てサポート (株式会社セイバン/全国)

SEIBANスマイルメンバーズは、セイバンのランドセルユーザーさまだけでなく、すべての就学前・小学生のお子さま・ご家族さまが無料でご利用いただけるメンバーズ制度です。

子どもたちにとって小学校の6年間は、知性や感性、社会性を育み、長い人生の出発点となる大切な時期だと考えています。

私たちはランドセルメーカーとしての1度きりの接点だけではなく、ランドセルをお届けしたその後もお子さま、ご家族の皆さまに寄り添いサポートをできる企業として、探究子育てまなびメディア「Soda!Soda!」にてさまざまな情報配信を行い「お子さまとそのご家族の笑顔にあふれた生活の実現」の企業理念をもとに2021年10月SEIBANスマイルメンバーズを立ち上げました。

非認知教育の探究力を軸としてイベント・情報発信にて多様なサポートを提供しています。

SEIBAN
スマイルメンバーズ

Soda! Soda!
探究子育てまなびメディア



保見団地での地域づくり (一般社団法人JUNTOS/愛知県豊田市)

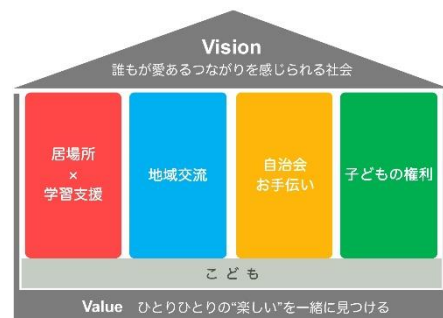
「誰もが愛あるつながりを感じられる社会をこどもと一緒に創造する」をスローガンに、愛知県豊田市の保見団地で地域づくりの活動をしています。

毎週土曜日の教室では、地域課題やキャリアなどのテーマについて、こども主体で考えを深めたり、SNSやポスターで地域に発信したりしています。

地域イベントでは、こどもたちや地域住民の皆さんと一緒に企画・準備・運営を行っています。

JUNTOSは、ポルトガル語とスペイン語で”一緒に”という意味です。そのため、どの活動においても、こどもたちの楽しい! やりたい! という気持ちを大切に、一緒に考え楽しむことを意識しています。

JUNTOSを通して関わる方々にとって、自らのルーツに誇りを持つきっかけ、新しいつながり、地域への愛着が育まれるような場を目指しています。



こどもまんなかアクションの事例 ⑩

共働き・共育て

子連れワーク「ママプラス」 (特定非営利活動法人 彩結び/東京都北区)

わたしたちは、こどもと一緒に働く新しい働きかた「子連れワークママプラス」を実践しています。

現代の日本の社会で足りていないフルタイムだけではない柔軟な働き方、職住近接のモデルケースとなる取り組みです。

働くママ達は、こどもを保育園等に預けず一緒に出勤し、仕事中は、抱っこやおんぶ【カンガルーワーク】、ママ同士の預かりあい【ペアワーク】や多世代のボランティアにこどもの保育をお願いする仕組みを活用し、仕事に従事しています。

ママ友ともサークルとも違った【仕事】という軸での新しい繋がり・役割を得ることで、育児中のママの孤立化やこどもへの虐待を防止します。

また、「保育園に入れたいが、働きたい・社会参加したい」という思いを持つママが、自ら助け合うことで就労・社会参加の機会を切り拓きます。



Co育てPROJECT (江崎グリコ株式会社/全国)

「Co育てPROJECT」は妊娠から始まる1000日間をサポートするプロジェクトです。ママとパパ、こどものまわりにいるみんながコミュニケーションを取りながら協力し、一緒にこどもを育てるスタイルを促進しています。

具体的な取組として、誰もが使える子育てアプリ「こぺ」の無償提供、日本初の乳児用液体ミルク「アイクレオ赤ちゃんミルク」の発売、企業向け両親学級「みんなの育休研修」の実施、他社や自治体との協同取組などがあります。また、社内では独自の育休制度で育休取得率100%を2020年度以降継続、上司・同僚が育児に対する理解を深められる仕組みを継続して実行しています。

これらの活動により社会における育児に対する理解を深め、今後も育児環境の改善を目指して参ります。



こどもまんなかアクションの事例 ⑪

こどもまんなか応援サポーターとの連携 (1)

番町SJEマルシェ

「障害者の就労支援をもっと楽しく！開かれたものに！」をコンセプトに、こどもまんなか応援サポーターの一般社団法人HAKKENが主催する「番町SJEマルシェ」に参加しました。このマルシェでは、ダウン症や知的障害のある約30名の若者が、マルシェの活動を通じて共に働き、地域の方々と交流する体験をします。

こども家庭庁は「缶バッジづくりを体験できるブース」を出展し、ばんさん、みさちさん、りょうたさんの3名が業務のお手伝いに参加してくれました。3名には、来場者の缶バッジづくりのサポートや、こども家庭庁の資料配布、こどもまんなかアクションを発信するLINEの周知などを担当してもらいました。

会場やブースに来た来場者一人ひとりに丁寧に対応し、笑顔で積極的に声かけを行うなど、とても意欲的に取り組み、こども家庭庁のブース運営に大きく貢献してくれました。



こどもの居場所づくりオールミーティング

認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ協力のもと、渋谷区児童青少年センターフレンズ本町にて、「こどもの居場所づくりオールミーティング」を開催しました。

第一部では、こどもの居場所を運営する多様な関係者が「こどもの居場所を作るうえで重要視していること」をテーマに各団体の取り組みと考え方を共有しました。完璧な居場所を一方向的に提供するのではなく、不完全をであることを前提に互いの役割を見出し、ともに変化し続ける姿勢の重要性や、家庭環境や経済的事情など「大人の都合で線を引かないこと」が、こどもが一步を踏み出しやすい環境づくりにつながるとの意見が示されました。

第二部では、こどもの居場所を後方支援する関係者を中心に「居場所の役割」や「存在そのものを発信することの重要性」について意見交換を行いました。「居場所＝困難を抱えた子どもたちのための場」という固定的なイメージがある中で、「誰もが気軽に利用できる居場所であることを積極的に発信していくことが重要」との認識が共有されました。



こどもまんなかアクションの事例⑫

こどもまんなか応援サポーターとの連携(2)

ユースのアクションサミット2025

こどもまんなか社会の実現に向け、若者の社会参加の輪を広げていくことを目的として「ユースのアクションサミット2025」を2024年に続いて開催しました。本サミットには、全国各地でこどもの居場所づくりや学習支援など、精力的に活動している6団体が参加しました。

第一部は、各団体が地域において実施している活動内容や具体的な実践事例について紹介しました。あわせて、活動を通じて感じている課題についても、それぞれの団体が自らの言葉で発表しました。

第二部は、グラフィックファシリテーションを活用した意見交換を行いました。参加者からは「特別な人しかできないのではと感じていたが、“安心して参加できる雰囲気”や“背中を押してくれる存在”により不安を乗り越えた」という声や、「活動を通じて自分も成長できる」「『意識高い』のではなく楽しくやっているフツウの高校生です。」という声がきかれました。

また、楽しそうに活動する姿が新たな仲間を呼び込むことにつながるという意見も多く示され、喜びや達成感を伴う活動が、持続可能な取り組みにつながる共通認識が参加者間で共有されました。



こどものまわりのおとなサミット

全国でこども・子育てを支える活動をしているサポーター団体とその関係者が集まり、それぞれの活動内容を紹介。また、活動の継続性や地域での連携などをテーマとした意見交換をグラフィックファシリテーションを取り入れた形式で実施しました。「ななめの関係性づくりはとても大事。こどもたちの活動に大学生が入ることは発見だった」「地域のしがらみは確かにあるが、それを超えて活動するには「よそ者の視点」も有効

「発信・PRの重要性を感じた。若者が入るとおしゃれな発信になる」といった活発な意見が交わされました。

